

メルロ＝ポンティにおける嫉妬と愛

酒井 麻依子*

はじめに

メルロ＝ポンティ (Maurice Merleau-Ponty, 1908-61) は、主著『知覚の現象学』¹⁾ (1945年) をはじめとするさまざまなテキストの中で愛についての分析を行っている。メルロ＝ポンティにとって愛とは、精神分析的な意味において人間が生まれ落ちてから直ぐに周囲と取り結ぶ関係であり、人間同士の共存や他者問題を論じる際の重要な要素を成す主題である。今回われわれはソルボンヌ講義「幼児の対人関係」(1950-51年) とコレージュ・ド・フランス講義「個人及び公共の歴史における制度化」(1954-55年、以下「制度化」講義)、とりわけその「感情の制度化」²⁾ についての議論を、嫉妬と愛という主題を中心に読み解く。

まずは、二つのテキストの説明をしておこう。メルロ＝ポンティは1949年から52年にかけて、パリ大学文学部において児童心理学と教育学の講座を担当していた。これは通常ソルボンヌ講義と呼ばれる全七章からなる講義群である。そのソルボンヌ講義の中でも他の章に比して、「幼児の対人関係」の章は早々に邦訳・紹介もされたことから国内で頻繁に参照されてきた。その章では、幼児が自己と他者を区別しない集合的・匿名的な生を生きているという主張が、J・ピアジェやH・ワロンらの研究を参照しつつ行われている。この幼児の原初的自他未分化性は、個人をあらかじめ外界や他者と区別された自己意識と定義して他者問題の困難を生じさせた古典の心理学あるいは哲学の前提を覆し、他人知覚や共感³⁾ といった現象を説明可能にする。

* 立命館大学大学院博士後期課程

さらにメルロ＝ポンティにおいてこの発想は、特に彼の後期思想において自己と他者そして世界との等根源性の主張へと結びついているため、単なる科学的成果の紹介ということにはとどまらず、彼の哲学思想の中でも重要な位置を持っている。ソルボンヌ講義の後、メルロ＝ポンティは「制度化」講義の中で、M・プルーストの作品を元に「感情の制度化」について論じている。「制度化〔institution〕」は創設とも訳すことができる概念であり、われわれの問題とする「感情の制度化」の章においてはさしあたり、愛という感情がいかにして生じ、その現実性が確信されるまでに至るのかということが問題にされたといえよう。ソルボンヌ講義がメルロ＝ポンティ研究において、言語や表現を主題とした中期思想に属するものと見なされているのに対し、「制度化」講義は一般的に「制度化」概念の導入を境目とした後期思想に属するものと見なされている。しかしソルボンヌ講義と「制度化」講義の間には、多くの共通する主題や着想が見出される。そこで、われわれはこれら二つの講義を嫉妬と愛という主題のもとで同時に取り上げ、両者の議論をメルロ＝ポンティの恋愛論の深化としてひとつなぎに解釈することを試みる。そのような試みを通して、われわれにとって抜き差しならない愛という〈他者との共存〉についての一つのヒントをメルロ＝ポンティの思索から得たいと考えている。

1. 嫉妬

「幼児の対人関係」でメルロ＝ポンティは、幼児が自分と他人の境目に関する意識を持っていないという自他の癒合性〔synchrétisme〕に関する心理学者たちの主張を紹介し、それらに賛意をしめしている。われわれ成人が自己と他者の関わりについて論じる際に前提としがちな、他の事物や人間から区別される独自の存在者としての〈私〉という観念は、自己と他者の区別を持たない幼児においては未だ獲得されていない。それゆえ幼児は自分を外部か

ら眺め、相対化するような別の視点（他人の視点）が存在するということが想像することができず、あらゆる事物や人間に対して自己を投影したり同一化するという態度をとる。これがピアジェのいうところの自己中心性である。メルロ＝ポンティは講義中で、そのような自己中心的な幼児が、感情の発達や鏡像段階といった契機を経て次第に「脱中心化」されていく過程を、言語習得や他人知覚といった問題との関係で整理している。そして、そのような探求の一環として、幼児の自他未分化性の現れの一つである嫉妬の現象を扱っている。メルロ＝ポンティにおける愛の問題を検討するにあたって、われわれがまず確認したいのはこの嫉妬についての議論である。もちろん、嫉妬は常に愛との関係においてのみ生じるわけではないが、しかしある特定のタイプの愛においては、嫉妬はしばしば本質的な仕方であらうに愛に付随するものであり、実際、のちに見るプルースト読解において、メルロ＝ポンティはここでの嫉妬の分析を議論のために大いに役立てている。メルロ＝ポンティは主にH・ワロンの研究に依拠して嫉妬を論じているため、以下ではワロンの議論をまず確認し、それに対するメルロ＝ポンティの注釈を見ていこう。

ワロンは『児童における性格の起源』において、幼児が自己と他者と外界とが癒合した状態を生きていると主張する。幼児におけるこうした癒合性の発露を、ワロンは大まかに二つの段階に分けて、考察している。まずワロンは、シャルロット・ビューラーの研究から、三ヶ月以上歳の離れた二人の幼児が差し向かいになるとき、一方がおもちゃを見せびらかし遊んで見せ、他方がそれを見つめるという、誇示する者と観照する者のカップルが形成される現象を取り上げている。これをワロンは、二人の幼児が完全に相補的な対をなしている状態であると解釈する。すなわち、一方で、観照する者は誇示する者を眺めてはいるが、彼（女）に嫉妬しているわけではない。なぜなら、観照する者は誇示する者にすっかり一体化し、誇示する者の立場に身を置いてしまっているからである。他方で、誇示する者は、ヘーゲルにおける主人と奴隷の関係のように、おもちゃを見せびらかして遊んでいる間、観照する

者の称賛を求め、それを絶えず想像しており、それゆえある面で観照する者の立場に身を置いている。要するに、両者はお互いの立場を区別せずに、誇示する者 - 観照する者という相補的な二つの役割を同時に生きているのである。

嫉妬が観察されるのは、上述の時期よりも少し後になってのことである。この時期においては、個性性が発達し始めるために、もはや以前のように状況の中の二つの役割（誇示する者と観照する者）が完全に一体となることはなく、観照する側の内には誇示する側になりたいという感情や欲求が生まれるようになる。これが嫉妬である。つまり嫉妬とは、一方では誇示する者へと同一化するという自他未分化の態度を取りながらも、他方では自分が現実には誇示する者ではないという事実、すなわち自他の区別を漠然と感じ取ることによって生まれる複合的な構造をもった感情なのである⁴⁾。

ワロンは「分化した癒合性」(Wallon, p. 257 / p. 225)であるこの嫉妬を自分の飼い犬を例に説明している。二匹の犬がおり、雌犬がなでられるときには、他方の雄犬は相手がなでられているのを見て自分がなでられているかのように満足の身振りを示した。だが反対に、雄犬がなでられるときには、雌犬はたまらなくなつて雄犬に取って代わろうととびかかった。先の場面で雄犬が共感を示したのに対し、後の場面では雌犬が嫉妬を示している。幼児も同じように他の幼児が世話をされているのを見ると泣き叫ぶなどして嫉妬を示す。基本的に年齢や条件の近い他の幼児に嫉妬するが、ときに大人や人形のような物にまで嫉妬する。

さらにワロンは、嫉妬の中にもいくつかの段階の違いを見て取っている。もう少し後の時期になると、幼児は嫉妬において、相手にとって代わろうとするかわりにふてくされを示すようになる。これは、積極的に相手と闘争することよりも、だまって苦痛に満ちた反芻をする態度の方が優位となっていることの現れである。嫉妬する者は他人の成功によって彼(女)固有の実存を侵される。彼らは他人の成功を彼ら自身の本質と混同しており、自分のも

のが相手に奪われていると感じるのである。時にこの密かに嫉妬を育てる行為が限界を迎え、嫉妬を掻き立てる相手への攻撃が生じることになるが、その時嫉妬する者は相手に危害を加えるとともに、自分に属していると彼（女）が感じている相手の良いもの（先の例では相手の成功）を破壊し、それによって自分をも部分的ないし全体的に破壊する。これはサディストが相手を苦しめることで自分も性的快楽や苦痛を感じることに類似している。だが純粋な嫉妬においてはマゾヒズムの方が優勢であり、嫉妬する者は自分の不安をかきたて、しばしば性感を得るべく、相手を見張り、浮気の場面を思い浮かべ、あるいはそれを目撃しようとするのである。嫉妬とそれに類似するこれらすべての態度において、他人に属するものと自分に属するものを混同するという幼児の段階への退行が見られるとワロンは考えている。

以上のようなワロンの分析を受けて、メルロ＝ポンティは次のように述べる。幼児は独立した、肯定できるような自分の生活というものを知らないために、自分の生活と相補的な——自分にはないものを持っている——他人の生活を想像する。それと同様に嫉妬深い人は「自分のものと言える固有のものを何も持たないために、他人が持っていて自分に欠如しているものを通じて、他人との関係から全面的に自らを規定する」（PA, p. 213 / p. 174）。さらには、そのような人は欠如を感じるがゆえに他人の経験や役割までも自分のものとして生きようとする。このような分析はプルーストの作品の読解に繋がられている。『失われた時を求めて』の主人公マルセルがジルベルトに初めて会ったときに、自分が遊び仲間から仲間外れにされていると感じたのは、まさに他人の経験が自分に欠けていることを感じ、嫉妬しているからである。さらに、マルセルが成人した後にもアルベルチヌへの嫉妬に苦しみ、彼女が寝ている時あるいは彼女が死んだときにしか苦しまずに愛することができないというとき、メルロ＝ポンティによればマルセルは依然として、自分の見ているものに同一化するという嫉妬の法則に従っているのである。

先に述べた嫉妬が退行であるというワロンの記述に対して、メルロ＝ポン

ティは基本的に同調しているようである。しかしながら、多くの発達過程において、幼児はいつまでも他人に嫉妬し続けるわけではない。幼児が嫉妬を感情的に乗り越えなければならぬときがやってくる。例えば、これまで末っ子だった子供に兄弟が生まれたときには、自分に向けられていた注目や愛撫が下の子へと向けられることを承認し、自分もその子を可愛がらなければならない状況に直面する。このとき幼児はひたすら周りの人たちの注目を受け、自分からはなにも与えることのなかったような〈独占的態度〔attitude captative〕〉から〈献身的態度〔attitude oblativ〕〉へと移らなければならない (Cf. PA, p. 169 / pp. 124-25)。嫉妬の克服は、他人に属するものを自分のそれと混同して引き受けようとする態度が少なくなること、つまり癒合性の減退であると同時に、自己中心性の克服、すなわち脱中心化である。脱中心化とともに幼児は、自分が絶対的な年下で、誰からも世話を焼いてもらう側だった状態から、兄や姉に対して相対的に年下であるとともに、自分の妹や弟、あるいは他の年少者たちに対して相対的に年上であるような状態へと移行し、年下に対して世話を焼く立場を引き受けることになる (相対性と相互性の獲得)。

ところで、メルロ＝ポンティは自己と他者の癒合性はたとえ成人になっても決定的に解消されるわけではないと主張する。三歳の危機と呼ばれる時期において、「生きられる隔たり」(ミンコフスキー)が出来上がり、幻覚や転嫁を生んでいた「目がくらむほどの他人との近さ」(PA, p. 227 / p. 189) はもはやなくなるのだが、それでも自他の未分化性は成人の生活の限られた状況、それも非常に重要な状況において不可避免的に再び現われるというのである。その状況とは愛が問題となるときである。だれかを愛したその時から、人は、たとえ現実に愛する相手に成り代わることができないとしても、愛する相手の苦しみによって自分も苦しむことになる。それゆえ、「人はもはやこの愛がなかった頃と同じではなく、やはりパースペクティブの浸食というものはある」(PA, p. 228 / pp. 190-91) ということができる。愛においては、

人はどこまでが自分の持ち分であり、どこからが相手の持ち分かを区別することも、互いの役割を絶対的に区別することもできない。したがって、愛というある意味で他者経験の一つの極限例とも言える経験は、自他未分化性（ある程度）乗り越えたはずの成人を再び他人との混淆状態の中に投げ込むことになる。

他者経験は、それが確信的なものであり真に他者経験であるならば、その経験が私独りの状態から私を追い出し、私と他人との混合物を創設〔instituer〕するという意味において常に「他有化的〔aliénante〕」な経験である。（PA, p. 228 / p. 191）

ただしメルロ＝ポンティは成人の愛において、癒合性が「再び現れる」（PA, p. 227 / p.190）という言い方をしているものの、成人の愛に見られる癒合性と幼児における癒合性は、われわれには決定的に異なっているように見える。なぜなら、幼児的癒合性が〈独占的態度〉のうちで発現するのに対して、成人、とりわけ脱中心化を果たした「正常な」⁵⁾成人の癒合性は〈献身的態度〉のうちで発現するからである。次節でわれわれは、両者の違いをメルロ＝ポンティが遺棄神経症について行った考察に依拠して明確にしたい。われわれの考えでは、遺棄神経症とは〈独占的態度〉と結びついた幼児的癒合性が成人において発現する事例であり、この事例と対比することで、幼児的癒合性とは異なる「正常な」成人の癒合性というものをメルロ＝ポンティが想定していたことが明らかになるように思われる。

2. 病理と幼児の愛

本節では脱中心化以前の幼児の〈独占的態度〉と相関した愛がメルロ＝ポンティにおいてどのようなものとして考えられているかを見て行こう。メル

ロ＝ポンティはソルボンヌ講義「幼児の対人関係」に先立つ「幼児意識の構造と葛藤」の章で、このような愛のあり方を、G・ゲクス『遺棄神経症』を手がかりとしながら論じている。

遺棄神経症において患者は彼らに欠けている情緒的安心感を追い求め、幼少期に遺棄されたという感情を持ち、そして成人後も見捨てられることへの不安に苦しんでいる。ゲクスによれば、アバンドニック（遺棄神経症者）においては超自我が不在である。というのも患者は超自我の形成に必要な性器期に達したことがないためである。そのためエディプス・コンプレックスや超自我を前提とした伝統的な精神分析による遺棄神経症の治療はうまくいかないとゲクスは考える。

通常の場合、人は他人のさまざまな行動の中に、それらを超えた意図や感情を見出すものだが、アバンドニックにとって他人の感情、意図といった内面的所与は信用のおけないものであり、「アバンドニックにとっては、〔他人の意図や文脈をはぎ取った後の〕自然のままの状態にあると見なされる事実」（Guex, p. 20 / p. 12）、すなわち外面的にはっきり見て取られる所与の方こそが必要とされる。愛について言えば、アバンドニックは感情を信じられないために直接的な愛の「証明」を絶えず求め、相手が期待通りに証明することができなければ——そして実際に、人はアバンドニックの過剰な期待に応えることができないのだが——相手を激しく非難するという形で攻撃性を示す。例えば、あるアバンドニックは愛されているのであれば相手が自分の密かな望みを見抜いてくれるはずだと期待していたため、わざわざ自分の望むこととは反対のことを言っていた。当然その結果、相手はそれを汲み取ってくれず、彼女はひどく幻滅したのである。

アバンドニックは直接的「事実」を追求するのと同様に、常に絶対的な愛情の表現を求める。例えばある患者は妻が自分以外の人たちと時間を過ごすことを許せない。外面的な「事実」を求めることから、アバンドニックにとってあらゆる偶発事（事故や病気で面会をキャンセルするなど）は仕方の

ないことではないし、〈いついかなる時にも示される愛情〉という絶対的なものについての欲求から、あらゆる相対的なものを認めることができない。彼らは完全でなければ無であるという法則にのっとって思考する。これは、幼児において見られた経験の非相対性に通じる態度である。

このように「事実」をひたすら求める傾向は、ゲクスによれば、自己肯定感の欠如と関係している。アバンドニックは自分自身を無価値であると感じており、人生において自分が取るに足りない余計な人間で、その場にふさわしい〈この人〉ではなく「〈もう一人〉」(Ibid., p. 36 / p. 24)であって、周囲から「排除されている」(Ibid., p. 35 / p. 23)と感じている。そして、このように自己の価値を極めて低くしか受け取れないがゆえに、アバンドニックは感情や意図といった不確かな所与の存在を信じることができない。というのもゲクスの考えでは、見かけ上の諸事実のかなたに意図や感情を認識するということは、認識する側に内的で健全な安心感があることを前提しているからである (Cf. Guex, p. 20 / p. 12)。

さらに、こうした自己肯定感の欠如は患者自身の内に無力感を生み出し、その結果、患者は自らの能動性を放棄してさらなる受動的態度をとるに至る。ゲクスによればアバンドニックの基本的態度は受動的であり「幼児期の受け取り、独占する態度に固定されている」(Guex, p. 22 / p. 13)。それゆえアバンドニックは他人を献身的に愛することができない。

アバンドニックが理想とし、追い求める愛とは、自己と他者が、例えば神のような一者に吸収されるか、あるいはいずれかが他方に吸収されるかして、不可分に融合してしまう愛である。ゲクスはこの発想についてアバンドニックにとって孤独でないこととは「母親へのえも言われぬ帰属状態に戻る」(Ibid., p. 37 / p. 110n5) にほかならないと述べるのだが、それはすなわち胎内にいたときや乳児期のような自他未分化の一体感を求めるものであると言える。それは通常、成人において不可能なことであるため、アバンドニックは自分か相手の死がそのような愛を実現してくれるという期待を

抱く。ゲクスは、ある患者が愛する対象の死においてしか安心感を得られなかったという事例を挙げている (Cf. Guex, p. 53 / p. 37)。

以上のようなゲクスの議論を受けて、メルロ＝ポンティは次のように論じる。われわれが他人を経験するとき、それは常に疑惑の機会にもなりうる。というのも相手の感情が絶対に証明されることはなく、私に対する相手の感情が真実であるということを私はいくらかでも疑うことができるからである。「愛していると言うこの人も、自分の生活のあらゆる瞬間を愛する相手に捧げるわけではない」(PA, p. 228 / p. 191)。だがアバンドニックのような幾人かの人はこの事実を愛の拒絶と受け取り、信頼することを拒み、限られた証拠だけでは愛を信じようとしない。こうしたアバンドニックの愛し方を、メルロ＝ポンティはゲクスの議論に沿ってエディプス・コンプレックスを通過する以前の幼児の愛し方と結びつけている。「幼児は必然的にアバンドニックに愛するのである」(Sorb, p. 234)。

このようにアバンドニックの愛を成人における「病的」で幼児的な愛として位置づけることで、メルロ＝ポンティは同時に、アバンドニックの愛とは異なる「正常な」成人の愛というものが存在することをほのめかしている。

幼児の〈独占的愛〉は決して証拠に飽き足らず、ついには自分の内在のうちに相手を閉じ込め、幽閉する愛である。病的でない正常な態度は、証明しうる以上のことを信じ、実践の寛容さによって、生み出される中でおれを証明する行動によって、感情の現実性に唱えられうる疑いを乗り越えるところにある。(PA, p. 228 / p. 191)

愛は絶対的に証明されることはなく、実践の中で生み出されていくしかない。これがメルロ＝ポンティの愛についての基本的な考えである。そして、〈独占的態度〉から〈献身的態度〉への移行は、〈自己の内への他人の幽閉〉から〈実践による創設〉への愛の様相の変化であり、ナルシシズムから対象

関係への移行でもであるとされる。さらにそれは、「偽の」他者経験と「真の」他者経験の違いとすら考えられているように見える。

偽の対象関係：われわれが他人に同一化するとき、他人の現前はわれわれをわれわれ自身から連れ出すことが無い。したがって実のところ、真の関係の失敗というものがあるのだ（エディプスの窮地 [impasse]）。（Sorb, p.339）

この引用は、他人とのごく日常的な関係にまで敷衍して理解できるだろう。他人と向き合い交流しているように見えて、実はわれわれが自分の枠組みから一歩も出ることなく、他人を自分に重ね合わせて理解しているにすぎないということは往々にしてある。そのような他者経験を、メルロ＝ポンティはここで「偽の」対象関係として語っていると思われる。こうした「偽の」他者経験から「真の」他者経験への移行を、メルロ＝ポンティはピアジェの「脱中心化」やワロンの「三歳の危機」、さらにはエディプス・コンプレックス⁶⁾といった概念と結びつけて考えているように思われるが、二つの他者経験の関係は必ずしも明確化されていないし、また心理学的概念と精神分析的概念の関係は調停されていない。それゆえ、ここではメルロ＝ポンティがアバンドニックの愛に代表される「病的な」愛に対して、成人の「正常な」愛の存在を示唆し、対置していることを確かめておくにとどめたい。

メルロ＝ポンティはゲクスによる遺棄神経症の研究を病理的事例として限定的に扱うことはせず、われわれの自己と他者の関係へと一般化して自らの議論に用いている。そこから、アバンドニックについての議論をプルート読解に結びつけるという観点が生じてくる。メルロ＝ポンティは『失われた時を求めて』について語る際、主人公マルセルの愛を明白にアバンドニックとの共通点でもって理解している。例えばソルボンヌ講義では、上記の、〈無価値な私はみんなから排除されている〉というアバンドニックの感情が、

マルセルがジルベルトやアルベルチヌたちに初めて出会ったときに体験した感情に重ね合わせられている (Cf. Sorb, 233)。しかし、メルロ＝ポンティがその後の「制度化」講義で本格的にプルースト読解を試みる際には、こうした読解に微妙な変化が見られる。そこで、次節では「制度化」講義におけるメルロ＝ポンティのプルースト読解を確認し、ソルボンヌ講義と「制度化」講義の間の愛の議論の差異を見極めることにしたい。

3. プルーストの懐疑——愛は幻だったのか

本節からは、「制度化」講義におけるメルロ＝ポンティのプルースト読解を確認し、ソルボンヌ講義における嫉妬や愛についての議論がそこでどのように活用され、展開されているかを検討する。『失われた時を求めて』の中で、主人公のマルセルは愛についてさまざまな懐疑を抱く。半ばプルーストの自伝にもなっているこの作品の記述を分析することによって、メルロ＝ポンティは愛についての議論を展開している。今回は講義の中で議論の中心を占めているマルセルとアルベルチヌの愛を見ていくことにしよう⁷⁾。マルセルのアルベルチヌへの愛をめぐる物語は大まかに六つの局面にわけることができる。

《出会い》マルセルはある土地で少女たちの集団の中にいたアルベルチヌを見初め、その土地の心地よい思い出や少女たちの集会的なイメージを象徴する存在として彼女を欲する。少女たちはマルセルには立ち入ることのできない神秘的な生を生きているように見えたがゆえに、彼はそこに入り込むためにアルベルチヌを欲するのである。そうした観点から見られたアルベルチヌとは空想上のアルベルチヌであり、ある種の幻といえる。

《倦怠》マルセルはアルベルチヌと結婚しなければならないと思ひ込み (実際には最後まで結婚しない)、彼女を家に住まわせるようになる。ところが、

パリに戻ると彼女を覆っていた幻は消え、マルセルはもはや彼女を愛さなくなる。彼女は彼に肉体的な鎮静しか与えない。

《幽閉》アルベルチヌは不審な言動をとり始める。マルセルは彼女が同性愛者ではないかと疑う。マルセルの「潜在的な」愛が嫉妬という形で姿を現す。だが彼は自分の愛をアルベルチヌに示そうとはせず、支配、取り調べのような態度をとる。

《出奔》幽閉に耐えかねたアルベルチヌは家を出て行ってしまふ。彼は彼女への愛に気づいて苦しむ。今度こそ彼女の自由を認める形で同棲しようと考えてるが、自尊心のために彼女に帰宅を素直に乞うこともできず、相手が自発的に戻るように策を講じなどする。

《死》ついにアルベルチヌは戻らなかった。彼女は事故に遭い死んでしまふ。彼女を永遠に失ったことで彼は悲しみに暮れ彼女への愛を強く感じる。

《忘却》アルベルチヌを思い出すのに段々苦しみを伴わなくなってくる。彼女が生きているという知らせ（この知らせ自体は後に誤報と判明する）を受けとってもマルセルは何も感じず、そのとき彼は自分がどれほど彼女を忘れていたかに気づく。

これらの出来事を受けて、マルセルはいくども愛への懷疑を抱くことになる。まず《出会い》の事実からは、少女たちの一団から一人を選びかねたために、アルベルチヌを選んだことは偶然でしかなかったという考えが生じる。また、アルベルチヌが身近になってからは、愛のきっかけとなった幻は消え失せ、《倦怠》が訪れる。《幽閉》においては、彼女がマルセルの元を離れて不在となっているときに、彼は嫉妬によって強く彼女を求めるが、彼女と顔を合わせているとうんざりしてしまう。さらに、《出奔》と《死》のあとでは、離別こそが愛を生んだのではないかと疑いさえする。最後に、《忘却》は彼に、死の知らせこそが愛を延長させたのではないかと自問させる。

要するに、愛が幻によって生じたこと、アルベルチヌと一緒にいても嫌

悪感があるだけで、相手が不在のときの苦しみや嫉妬という否定的な形でしか彼女への愛を感じないことが、マルセルに愛の实在を疑わせている。だがメルロ＝ポンティによれば、プルーストはこの疑いが半面しか妥当でないことを漠然と理解していたという。これはすなわちメルロ＝ポンティ自身がマルセルとアルベルチヌの愛について消極的な評価と積極的な評価を行っていることにほかならない。われわれは本節で先にプルーストにおける愛への疑いとそれに対するメルロ＝ポンティの反駁を確認した上で、次節でメルロ＝ポンティによるマルセルの愛への消極的評価と積極的評価の両方を見て行こう。

まず確認しておきたいのが〈所有としての愛〉に関する議論である。『存在と無』におけるサルトルの議論を念頭に置きながら、メルロ＝ポンティは、愛とは自由なままの他者を所有しようとする試みであるという考え方を検討している。そもそも、他者を事物のように所有したいと望むと同時に、同じ相手が事物ではなく他者であることを望むというこの欲望自体は矛盾したものである。なぜなら、このような愛は所有されないものであるかぎりでの他者を求めるからである。それゆえ、サルトルならばこの所有の欲望から始まった愛は挫折を余儀なくされると述べるだろう。だがメルロ＝ポンティは別のことも述べている。

他者を完全に所有するというのは幻である。[...] しかし、幻であるのは達成においてであって、それ自体現実的であるような企図においてではない。(IP, p. 66)

他人を所有しようとする企てはそもそも逆説的であるため、その達成は決して現実化されることのない幻にすぎないが、所有の企図そのものは幻ではない。それゆえ「[所有を求める愛は] 不可能な愛ではあるが非現実的な愛ではない」(Ibid.)。そのような愛は、マルセルのアルベルチヌへの愛がそう

であったように、「純粋な他有化〔魅了や嫉妬の経験〕と退屈な所有の循環」(Ibid.)つまり、完全に自由を謳歌している他者を観照することと、自由を失った他者を所有することが交互に入れ替わるという消極的・否定的な仕方で現実化されている。他人を所有するということはすなわち相手を自分の中に吸収することであるため、それはある意味で自己と他者が癒合・融合するということに等しい。所有としての愛をめぐるこうした議論は、ソルボンヌ講義で見た幼児の嫉妬やアバンドニックの愛についての議論と重ね合わされている。

嫉妬＝同性愛、すなわち愛される者への同一化、〈独占的愛〉。〔…〕彼はアルベルチヌを愛するのではなく、彼女が愛するかもしれない人々を愛する。(IP, p. 75)

注目すべきは、マルセルのアルベルチヌへの嫉妬が幼児の〈独占的愛〉と捉えられていることである。相手を疑い、糾問し、支配しようとし、ついには閉じ込めてしまうマルセルの愛は、幼児期の自他未分化性と自己中心性に起因する嫉妬深い愛であると言えよう。

マルセルの愛はつねに所有の欲望に彩られていた。マルセルは眠っているアルベルチヌを眺めているときにだけ自分が彼女を所有しており、愛が現実化していると考えていた。というのも彼女の不在時に嫉妬を募らせるときは異なって、眠っているときの彼女ならばすっかり認識下に収めることができたからである。すでに確認したように、メルロ＝ポンティはこの睡眠中のアルベルチヌを愛するくだりを「幼児の対人関係」において取り上げ、マルセルが「自分の見ているもの〔spectacle〕と同一化する嫉妬の法則に従っている」(PA, p. 215 / p. 176) ことを指摘していた。マルセルは、自己についての確信や確固とした自分の所有物と言えるものをもたないために、相手に依存し、相手の所有物に照らし合わせるという仕方で、つまり、相手が

もっているものを自分もっていないという仕方でも自分を規定しようとする。マルセルはアルベルチヌと同一化することで、彼女と同性愛的関係にある若い娘たちが彼に欠けていると感じていたということになるであろう。実際、マルセルはアルベルチヌが愛するだろう若い娘たちを部屋に呼び寄せもしていたし、アルベルチヌさえいなければ自分はいつでも彼女たちと楽しい時間を過ごせるのだとすら考えていた。

こうした態度においては、相手を自由のままにしておく限り、相手が自分の知らない間に自分もっていないものをさらに手に入れているのではないかという不安がつきまとう。マルセルの愛は、嫉妬の態度におけるこうした不安と結びついており、こうした不安の中でしか実感されることがない。それゆえ、マルセルの愛はアルベルチヌの不在の場面、つまり彼女がマルセルのもとを離れ、自由を謳歌している場面においてしか現れない。しかも、相手を完全に自分のうちに所有してしまうことは不可能であるため、「他人の現前は常にその不在と虚無を証拠づける」(IP, p. 74)。相手は目の前にいるときですら、意志として、自由として、過去を持つ存在者として〈私〉の把握から漏れ出てしまう。

だが、アルベルチヌが死んだときにマルセルの内に生じたのは、彼女がもはや逃げ去らなくなり、観念として完全にマルセルの内に所有されたという事態であった。マルセルは今や自らの内のアルベルチヌを愛することができ、もはや現実のアルベルチヌを必要としなくなったのである。だからこそ、アルベルチヌが生きているという誤報(別の女性から「私は生きています」といった内容の宛先違いの電報が届いた)に、マルセルは何の興味も惹かれないのである。

マルセルは彼女の死以前から「われわれが恋人同士であることに気づき、おそらく恋人同士になるためにすら、離別の日が訪れなくてはならない」(Proust, IV, p. 88 / 『逃げさる女』, p. 162) と考えていた。そして実際、出奔や死の離別に際して深く愛を感じた。またマルセルはいつも彼女の不在にお

ける嫉妬という形でしか彼女を欲しなかった。そこからあたかも不在や離別が愛を生み出したかのように考えていた。メルロ＝ポンティはこれらの否定的な事実を「愛は幻であるという理論の最高の証拠であろうか」と問うた上で、逆にそうだとすれば「不在はどうやって無からこの幻を創り出したというのか」(IP, p. 65) と言う。

メルロ＝ポンティはブルースト自身の記述を用い次のように続ける。マルセルが彼女への愛を信じなかったのは、その愛が「揮発状態 [á volatil]」であったからであり、彼はそれがアルベルチヌの出奔によって「結晶化 [cristallisé]」した時に信じたのだ (IP, p.71)。マルセルは出奔によって、「嫉妬が愛すること、愛する一つの仕方であるということ」に、そして彼が愛されることを求めなかったのは「愛されていたからだということ、この愛を考慮していたからだということ」に気づかされるのである (IP, p. 40)⁸⁾。マルセルはすでに嫉妬深い愛に浸され、われわれが身の回りの空気を意識しないのと同じような具合に、その愛の中で生きていたのである。

マルセルにとって愛は幻だったのではないかと疑わせる強力な最後の「証拠」は、〈アルベルチヌが生きている〉という誤報を受け取ったときの自らの無関心である。マルセルはこれを受けて、死の知らせこそが愛を延長させたのではないかと自問する。しかしメルロ＝ポンティに言わせれば、彼女の死後忘却が進んだということは、彼女の訃報を受け取って以降にマルセルが悲しみの中で感じた愛の現実性を打ち消すことはない。われわれは瞬間的な事実のみ拘泥するのではなく、愛は無数の現象を貫いて存在する「超現象的 [transphénoménal] な現実」(IP, p. 70) であることを認めなければならないのである。

4. 一つの愛－全ての愛、そして他有化の体験

マルセルは愛する者の不在に人生を通して苦しみ、その苦しみが母親への

愛、ジルベルトへの愛といった数々の愛を彩っていた。そして彼はアルベルチーナへの嫉妬深い愛もまた、それらの愛の繰り返しであるように考えていた。だがヴァントゥイユという作曲家の作品を鑑賞する場面においてマルセルに次のような啓示が訪れる。

[...] ほかのいくつかの愛 [amour] も、アルベルチーナへの恋 [amour] というこのもっとも広範囲にわたる恋を準備する短い臆病な試みであり、この恋を求める呼びかけにすぎなかったのではないか[...]。(Proust, III, pp.756-57 / 『囚われの女』, p. 441) (Cf. IP, p. 71)

この場面の以前には、マルセルはヴァントゥイユの或るソナタを聴き飽きて、そこに新しいものはもはやなにもないと感じていた。同様に、かつてのジルベルトという女性に対する愛の顛末からアルベルチーナへの愛を予想し、すべては自明で新しいものなどないと考えていた。しかしこの場面において、ヴァントゥイユの死後に発表された七重奏曲を聴いたとき、そこに挿入されたあのソナタの小楽節が引き起こした喜びによって、マルセルはヴァントゥイユのほかの作品全てがこの七重奏曲という傑作と比べれば試作に過ぎず、弱々しいものでしかなかったと考え、さらに自分がヴァントゥイユの世界を知り尽くしていると思っていたことが誤りであったことを知るに至るのである。

メルロ＝ポンティは、この場面を詳しく取り上げ、そこから互いに相補的な二つの考えを引き出している。一つ目は、一人の作曲家の全作品をその作曲家の人生を貫く一つの作品とみなせるのと同様に、マルセルの経験した全ての愛は相互に独立したものではなく、彼の人生を貫く一つの愛であるとする考えである。過去の愛は、一つ一つが完結してしまっているわけではなく、未来の愛を準備し、その新たな愛の中に捉え直されるという形で存続しているのである。マルセルは母親を、彼女が一晩だけ〈おやすみのキス〉をしに

来てくれなかったということから、非常に長い間恨んでいた。その母親への愛とはアバンドニックな幼児の愛にはほかならない。そしてジルベルトへの愛もまた遊び仲間から排除されているという嫉妬の感情と一体の幼児的な愛であったということができただろう。マルセルは以前のそれらの愛がある種の失敗に終わっていて、アルベルチヌへの愛もその単なる繰り返しとして捉えていたのだが、あの瞬間それらがアルベルチヌへの愛のための準備であったとマルセル自身によって気付かれたのである。

しかしそうは言っても結果から見れば、アルベルチヌの死は、マルセルが彼女の観念を完全に所有することを可能にしたという意味で、彼女の生前には不可能であった〈所有としての愛〉をマルセルに達成させたことになる。これはゲクスの報告した、相手の死によって相手を所有することを望むアバンドニックの事例を想起させずにはおかない。結局のところ相手の「〔死後の〕愛は、〔二人の間の〕愛としては実現されていない」(IP, p.67)。他者の全面的な現前を求め、他者を所有する欲望として愛を考える限り、愛は不可能になってしまう。そしてマルセルが追い求め、手に入れた愛もまた、この所有としての愛、アバンドニックな愛であり続けたことになるし、ソルボンヌ講義の時期のメルロ＝ポンティに言わせれば、マルセルは真に他者経験と呼びうるものを生きていないことになってしまうだろう。しかし「制度化」講義のメルロ＝ポンティは、マルセルの愛にたいして単なる対象関係の挫折という否定的な評価を下すことには満足せず、より込み入った読解を試みようとしているように思われる。

このことを示唆しているのが、メルロ＝ポンティが講義で提示する二つ目の考え、すなわち、マルセルのアルベルチヌへの愛は、母親やジルベルトへの愛の単なる反復ではなく、先行するそれらの愛を何らかの仕方で変形し、乗り越えるものであるという考えである。

愛が「一般的なもの」であったとしても（アルベルチヌへのジルベル

トのこだま)、アルベルチース〔へ〕の愛は、七重奏曲がソナタ（主観的なものの現実性、準プラトニスム）と異なるように、以前の愛とは異なるのである。(IP, p.72)

メルロ＝ポンティは同じところで、サルトルが『存在と無』において提示した愛についてのテーゼ、すなわち「愛するとは、その本質において愛されようとする企てである」(Sartre, p. 415 / II , p. 395) というテーゼを「愛するとは自己に戻ることでしかない」(IP, p. 40) と言い換え、マルセルが七重奏曲を聴く以前に「ソナタ」に対して抱いていた考えになぞらえている。「七重奏曲」はここでは単に「ソナタ」の捉え直しであるだけでなく、サルトル的な自己への回帰にとどまらない、われわれが自己や既知のものから連れ出される形での愛の存在を示唆するものとして解釈されているように思われる。実際、七重奏曲を聞いたときにマルセルは次のように独白する。

私がいりこんだこの未知の世界は、私には、それがヴァントウイユの創造した世界だとはすぐに感じとることのできなかつた世界だったのだ。なぜなら私にとって汲みつくされた宇宙であったあのソナタに飽きた私が、それとは異なるがおなじように美しい他の宇宙を想像しようと試みたとき、いままで私がやっていたのは、世間並の詩人たちのやりかた、いわゆる天国なるものを満たすべき草原や花や小川を地上のおなじ草原や花や小川にかさねあわせるにすぎない、というやりかただったのだ。(Proust, III , p. 754 / 『囚われの女』, p. 436)

つまり、マルセルは〈ヴァントウイユの音楽〉という世界を、彼がすでに手にしていたソナタを元手に構成して想像していたのだが、実際のヴァントウイユの世界はそれを凌駕するものであり、既得物から推測することなど不可能なものだったのである。プルースト自身はこうした事態とアルベルチース

への愛との連関をほのめかすにとどまっているとはいえ、メルロ＝ポンティは両者をはっきりと重ね合わせている。そのためメルロ＝ポンティが、マルセルのヴァントゥイユの世界に関する気づきを、アルベルチヌという人格に関する気づきに関連させて解釈していると考えられる。その解釈とはすなわち、マルセルが上記の啓示を得たとき、彼は同時に、これまで自分がアルベルチヌという人物を自らの経験を元に構成し、彼女を自分自身の単なる反映という地位に置いていたのが、気づかないうちに相手によって自己の中から引き出され（他有化）、アルベルチヌの持つ他性という「未知の世界」に入り込んでしまったことを悟ったのだ、という解釈である。

他有化（〔所有の〕挫折）は愛と一体であり、むしろ愛の現実性なのだ。愛は人を自己の彼方に、そして所有の誤った欲望の彼方にすら連れて行くのである。（IP, p. 74）

はじめりにおいてマルセルの愛がナルシズムでしかなかったとしても、彼はそのナルシシクな愛を通して徐々にそれを乗り越えつつあったということができるのではないだろうか。少なくともメルロ＝ポンティはそのように考えていたように思われる。

というのも、アルベルチヌの死は、確かに彼女の死後長い時間が経過して苦しみが和らいできたときには、彼が彼女を観念として愛することを可能にし、マルセルの所有の愛を完成させるものだったように見えるが、死の直後に彼が悲嘆にくれていたときには、アルベルチヌという比類ない人格が究極的に逃げ去ったということとして現れていたのだからである。その死に際してマルセルの感じた苦しみとはまさに愛そのものであり、「苦しみの試練において、人は欲望と支配の向う側にいる」（IP, p. 74）のである。

「幼児の対人関係」において、幼児的な嫉妬は成人の「正常な」愛に取って代わられるべき否定的なものでしかなかった。しかし「制度化」講義にお

いてはその嫉妬もまたれっきとした愛であって、なおかつその嫉妬という愛の中ですら主体が他者を経験することになるという両義的な位置づけに変化している。こうしてみるとメルロ＝ポンティにとって『失われた時を求めて』の物語とは、主人公が自己に他者を幽閉する形で、幼児におけるような自他の癒合状態を実現する物語ではない。むしろこの物語は、嫉妬深い幼児的な愛を通じてマルセルが自己から連れ出された結果としての「二人の間の創設」(IP, p. 65)を描いたものであると考えることができるのである。

おわりに

本論文ではメルロ＝ポンティの「幼児の対人関係」における嫉妬と愛の議論から出発して「制度化」講義のブルースト読解における嫉妬と不可分の愛についての議論を確認してきた。「幼児の対人関係」では、ワロンにそって成人の嫉妬はもっぱら幼児期の自他の癒合状態への退行とされていた。メルロ＝ポンティは幼児の癒合性は成人においても愛という形で再び現れると言うのだが、その成人における癒合性は幼児の癒合性とは様相を異にする。メルロ＝ポンティは、ゲクスの観察したアバンドニックの愛を成人における幼児の癒合性の現れと位置づけた上で、アバンドニックの幼児的で「病的な」愛と成人の「正常な」愛を区別していた。そしてわれわれは「幼児の対人関係」において『失われた時を求めて』の主人公マルセルが、幼児的な嫉妬に結びつけられ否定的な評価をされていることを見た。

「感情の制度化」においてマルセルの愛は嫉妬深い愛と表現される。マルセルが追求した愛は、自由な他人を所有する試みになってしまうため、挫折を運命づけられており、アルベルチヌの死によってある意味達成されたものの、二人の間の現象ではない以上それは真の意味での愛としては成立していないものであった。そしてそのような愛はアバンドニックに代表される幼児的な愛、すなわち〈独占的愛〉と結びつけられている。アバンドニックの

愛は、自己からの投影によって他者を把握し、相手を第二の自分自身として、自らの想像の範囲内に押し込めてしまうものであるために、真に他者を経験しているとは言いがたい、というのがソルボンヌ講義でのメルロ＝ポンティの見解であった。それではマルセルは、自分自身を愛し自分の分身と暮らしていただけで、アルベルチヌという他者と真に出会っておらず、彼女を愛していなかったのだろうか。「制度化」講義では、「幼児の対人関係」と同様、メルロ＝ポンティは一方でマルセルのナルシズムを強調するものの、他方でマルセルの愛がマルセルを彼自身の内在から引き出してアルベルチヌその人に触れさせたという肯定的評価を与えているように思われる。他有化——他者との接触によって自己が自己自身から引き出され、他者の内で志向的に生きてしまうこと——とは「幼児の対人関係」でも触れられた、真に他者経験と呼ばれるものの謂いであった。それは主体が愛のような他者経験において、相手の生き方によって影響をこうむり、もはや自分一人での自律的な生活を続けるわけにはいかず、相手との混合物と呼ぶべき共同の生を生きることになるということである。こうしてみると、「幼児の対人関係」とは対照的に、「制度化」講義においてメルロ＝ポンティは『失われた時を求めて』という物語を、〈二人の間の創設〉を描いた物語として読解していたと考えることができる。

他者経験のはじまりが同一化、つまり自己の経験に基づいて他者を推測し、相手を単なる私の分身にしてしまうことであったとしても、マルセルがアルベルチヌの所有を追求しながら、結局彼女の他性に気づかされることになったのと同じように、それが終始「偽の」他者経験に留まるわけではない。メルロ＝ポンティのプルースト読解は、同一化された分身としての他人とのふれあいに始まり、しかしながらそのふれあいの中で他人によって自己が突然「不意を突かれ方向を狂わされる」(PM, p. 198 / p. 188) という、メルロ＝ポンティの他者経験観がプルーストの物語の内に読み込まれたものとして理解することができるのである。

注

- 1) 本論で『知覚の現象学』は扱わないが、同著作を中心にソルボンヌ講義までの時期を含めて考察を行った研究に川崎唯史の研究がある(「メルロ＝ポンティと愛の現象学」、『現象学年報』2015年, pp. 125-133)。
- 2) 「感情の制度化」の議論について主に以下の先行研究を参考にした。Koji Hirose, *Problématique de l'institution dans la dernière philosophie de Maurice Merleau-Ponty*, thèse de doctorat soutenue a l'Université de Paris I, France, 1993. 加國尚志, 「感情の制度化——メルロ＝ポンティの1954-1955年講義より」, 『立命館文学』, No. 587, 2004年12月, pp. 313-23. E. de Saint Aubert, *Du lien des êtres aux éléments de l'êtres: Merleau-Ponty au tournant des années 1945-1951*, Vrin, Paris, 2004. A. Dufourcq, *Merleau-Ponty : une ontologie de l'imaginaire*, Phenomenologica 204, Springer, 2014. 加國はメルロ＝ポンティのプルースト読解を詳細に論じている。またSaint AubertとDufourcqはソルボンヌ講義におけるアバンドニックの議論と「制度化」講義の連関を指摘している。
- 3) ソルボンヌ講義における共感の議論については拙論「メルロ＝ポンティ：ソルボンヌ講義における共感——他者・言語との結びつき」, 『立命館哲学』, 立命館哲学会, 第25集, 2014年3月, pp. 51-74.
- 4) ワロンの説明と比べて、メルロ＝ポンティは「幼児の対人関係」の中で、これら二つの時期——自己と他者の区別がなく、すっかり一体化していて相手の満足が自分の満足であるような時期と、自己と他者の多少の区別が生じ他人に対して嫉妬する時期——を区別せず、嫉妬と自我未分化性の関連だけを強調してしまっている。しかし、そのような説明では、嫉妬する人が相手と一体化しているにもかかわらず、なぜ相手の満足を自分のものとして受け止められないのかを理解することができない。もっとも、こうした説明の不十分さを指摘するにあたっては、講義というテキストの性格も考慮すべきだと思われる。以下でわれわれは、メルロ＝ポンティの嫉妬についての議論を、必要に応じてより詳細なワロンの議論によって補完しながら読み解くことにする。
- 5) 「正常」と「病的」、「真の」と「偽りの」といった形容は、道徳的価値判断を連想させるものであり、メルロ＝ポンティ自身もそうした価値判断を暗に込めてこれらの語を使用している節がある。ここでわれわれはメルロ＝ポンティの用語法に従うが、これらの語の使用に付随する価値判断については留保し、これらの語をあくまで経験の様相の違いを表すものとして用いることにする。
- 6) この考えは、〈独占的態度〉と〈献身的態度〉の境界をエディプス・コンプレックスの形成の内に見るゲクスの考えを受け継いだものと考えられる。
- 7) 「制度化」講義が扱うのは、物語の前半にあたるスワンとオデットの愛、そして後半にあたるマルセル(語り手)とアルベルチヌの愛である。オデットもアルベルチヌ

も性的に奔放な女性であり、ナルシシクな彼らは嫉妬に苦しめられる。オデットがスワンの財産目当てで彼を愛しておらず、スワンの愛が一人にとっての現象でしかなかったのに対して、アルベルチヌとマルセルの間には双方向の愛があったと言える。メルロ＝ポンティは両者の愛を基本的に同型の嫉妬深い愛として扱っているように見える。しかし、もしスワンの愛自体も、本稿第四節で考察するようなマルセルの一つ一つの愛の中に数え入れてしまえるのだとすれば——プルーストの物語の構成からすればそれは不可能ではない——スワンの愛とマルセルのアルベルチヌへの愛との間にはやはり差異が存在することになるだろう。

- 8) 「〔彼女の出奔が告げられるまで〕私はもうアルベルチヌを愛していないと思っていたし、〔…〕自分の心の根底まで知り尽くしていると思っていた。しかしわれわれの理解は、どんなに明晰でも、心の根底を構成する諸要素を逐一認めることはできないもので、それらの要素は多くの場合気化状態〔*à volatil*〕にあり、そんな状態からそれらの要素の一つ一つを分離可能にする現象が起こって各要素の固体化〔*crystallisé*〕が始まらないかぎり、それらを逐一認める訳にはいかないのである。自分の内心を明察していると思っていたのは私の勘違いであった。」 Proust, IV, p. 4 / 『逃げざる女』, p. 9.

凡例

- 参考文献からの引用は『失われた時を求めて』を除いて拙訳である。邦訳・英訳のあるものは参考にした。
- 語のまとまりを示す際は〈 〉を用いた。引用・訳出の際引用者による中略は〔…〕と表記し、引用者による補足や言い換え、原語を示す場合などは〔 〕を用いた。イタリックの箇所は傍点を付した。参考文献に邦訳のある場合は原書の参照ページ数の後にスラッシュ / で区切って邦訳のページ数を併記する。複数巻に分かれている文献については、巻数をローマ数字によって表記する。

略号

メルロ＝ポンティの著作、講義録

PA: « Les relations avec autrui chez l'enfant » [1951], dans *Parcours (1935-1951)*, Éditions Verdier, 1997, pp.147-229. 「幼児の対人関係」, 『眼と精神』所収, 滝浦静雄・木田元訳, みすず書房, 1978年, pp. 97-192.

Sorb: *Psychologie et pédagogie de l'enfant : Cours de Sorbonne 1949-1952*, Verdier, 1988. *Child Psychology and Pedagogy : The Sorbonne Lectures 1949-1952*, translated by Talia Welsh, Northwestern university press, 2010.

IP: *L'institution / La passivité: Note de cours au Collège de France (1954-1955)*, Belin, 2003.

PM : M.Merleau-Ponty, *La prose du monde*, tel, Gallimard, 2008 [1962]. 『世界の散文』, 滝浦

静雄・木田元訳, みすず書房, 1979年.

そのほかの人物による著作

Guex : Guex, G. *La névrose d'abandon*, Paris, Presses universitaires de France, 1950. *The abandonment neurosis*, translated by P.D. Douglas, Karnac, 2015

Proust : Proust, M. *À la recherche du temps perdu*, tome III et IV, Édition, Gallimard, Pleiade, 1987 et 1989. 『失われた時を求めて : VIII 囚われの女』および 『失われた時を求めて : IX 逃げ去る女』, 井上究一郎訳, ちくま文庫, 2005年と2004年.

Sartre : Sartre, J-P. *L'être et le néant : Essai d'ontologie phénoménologique*, tel, Gallimard, 2011 [1943]. 『存在と無 : 現象学的存在論の試み』, 松波信三郎訳, ちくま学芸文庫, 2007年.

Wallon : Wallon, H. *Les origines du caractère chez l'enfant*, Quadrige, PUF, 2009 [1949]. 『児童における性格の起源』, 久保田正人訳, 明治図書出版, 1983年.